Niigata University

音楽科の研究

黒﨑千賀子

キーワード

つくって重ねる　繰り返し試す　豊かな表現

主　張

本研究では「楽曲にリズムや旋律を重ねることで，表現がより豊かになるという認識を創りあげる子ども」を目指していく。

そのために，歌詞のある楽曲を取りあげ，その学年で身につけさせたい音楽を特徴づけている諸要素を軸に，つくって表現する活動に着目した。

歌詞からイメージしたことをもとに，歌唱表現を練り上げ，さらに願う表現に高めようと音楽を特徴づけている諸要素を取りあげて，リズムを重ねたり，旋律を重ねたりしながら「つくって重ねる」活動を展開していく。この活動を通して，自分の表現に生かしていく音楽を特徴づけている諸要素を更新し，それを手がかりに表現が再構成されることで，願った表現へと高まっていく姿を明らかにした。

NII-Electronic Library Service

Niigata University

Ⅰ　楽曲にリズムや旋律を重ねることで，表現がより豊かになるという認識を創りあげる音楽科

1．音楽科で求める子ども

求める子ども

楽曲にリズムや旋律を重ねることで，
表現がより豊かになるという認識を創りあげる子ども

「意欲・態度」

より主体的に多様な音楽的手法で表現しようとする力

「中核となる学力」

音楽を特徴づけている諸要素を感受する力
願いをもち進んで表現をつくりあげるための知識や技能

本研究では「楽曲にリズムや旋律を重ねることで，表現がより豊かになるという認識を創りあげる子ども」を目指していく。これは，表現への願いをもち，リズムや旋律をつくって楽曲に重ねる（以下「つくって重ねる」）ことで，音楽を特徴づける諸要素を駆使し，新たな表現方法で願った表現を具現する子どもである。

求める子どもに迫るため，歌詞のある楽曲を取りあげ，その学年で身につけさせたい音楽を特徴づけている諸要素を軸に，つくって表現する活動を展開していく。子どもが歌詞からイメージしたことから表現の願いを高め，音楽を特徴づけている諸要素を手がかりとすることで，楽曲に「つくって重ねる」活動を主体的に進めていけると考えたからである。

具体的には，歌詞からイメージしたことをもとに，歌唱表現を練り上げ，より一層願う表現に高めようと音楽を特徴づけている諸要素を取りあげて，リズムを重ねたり，旋律を重ねたりしながら「つくって重ねる」活動が展開できるようにしていく。これにより，歌唱やリコーダーなどの楽器を演奏する技能や音楽を特徴づけている諸要素にかかわる知識・理解，それらを感受する力といった，基礎・基本を身につけていく。

この活動を通して，自分の表現に生かしていく音楽を特徴づけている諸要素を更新し，それを手がかりに表現が再構成されることで，願った表現へと高まっていくことを期待した。

2．カリキュラム改善の視点

○「つくって重ねる」ことにかかわって，６年間の成長を見通し，発達段階に応じた身につけるべき音楽の諸要素を分析する。それを，教材曲と関連付けて，系統的・継続的に，カリキュラムに位置付けていく。

各学年のねらい	低学年 リズム感覚を高める	中学年 旋律の美しさの感受・表現	高学年 和声感覚を高める
音楽を特徴づけている諸要素等	リズム譜，拍･フレーズ，リズム	楽譜，ハ長調の階名，強弱や速度，旋律	和音，和声の響き
つくって表現の学習内容	簡単なリズムづくり	組み合わせの工夫とリズムや旋律づくり	楽曲の構成の工夫とリズムや旋律づくり

NII-Electronic Library Service

Niigata University

3．授業改善の方策

音楽科における学習過程を以下のように構成した。

〔知識・技能の習得〕

- 楽曲と出会い歌詞や旋律から表現への意欲を高める。
- 表現への願いをもつ。

◎自分の願いを表現しよう。

- 歌詞や音楽的な諸要素から感受した情景を表現するための呼吸の仕方や発音による歌唱表現の工夫をする。
- 表現づくりへの新たな視点（「つくって重ねる」）を得る。
- 感受した音楽的な諸要素を使い，願いをもって「つくって重ねる」ことで表現づくりをする。

＜教師の働きかけ＞

○題や歌詞の情景から願いをカードに書く場の設定
○範唱ＣＤを聴き,歌う活動の組織
○歌詞や旋律の音楽的な諸要素を話し合う活動の組織
○願いに近づける表現方法を話し合う活動の組織
○「つくって重ねる」方法を知り，表現をつくる活動の組織

〔習得した知識・技能の活用〕

- 中間発表により，友だちの表現のよさに気づく。
- 楽曲の音楽的な諸要素を見直し，表現をより願いに近づけるための方向を見出す。
- 自分の表現に取り入れたい具体的な音楽を特徴づけている諸要素を見つける。

◎つくった表現をさらに願いに近づく表現につくり直そう。

更　新　この音楽を特徴づけている諸要素を使うと，願いを表現できそう。

再構成　この音楽を特徴づけている諸要素を，ここにこう使えばいいんだ。

- 歌詞や自分の願いへの立ち返り，もとの楽曲の音楽的な諸要素を更新し，願い具現に向けた表現を再構成する。
- 発表への意欲が高まる。

○表現を聴きよさを価値付ける話し合い活動の組織
○もとの楽曲の音楽を特徴づけている諸要素を再度話し合う活動の組織

○友だちのよかった表現をもとに楽曲の音楽を特徴づけている諸要素を見直し，自分の願いを繰り返し試しながらつくって表現する場の設定

〔活用するよさの実感〕

- 発表により，自分の表現のよさをあらためて発見する。
- 活動を振り返り，価値付ける。

○発表する場の設定
○活動を価値付けるために振り返る場の設定

4．評価方法

○　カードによる表現状況と意欲の評価
- 表現への願いと表現状況の自己評価を行い，表現意欲や思考の様子を評価する。

○　記譜したものによる思考過程の評価
- 音楽を特徴づけている諸要素の使われ方の変化を子どもの記譜により把握し，思考過程を評価する。

○　ビデオによる表現の高まりの評価
- 完成した表現と初めの段階での表現の比較により表現の高まりを評価する。

○　カードによる単元の振り返りと活動全体の価値付けを行う。

NII-Electronic Library Service

Niigata University

Ⅱ　実　践

第２学年　「すてきなリズムで楽しもう」～教材曲『山のポルカ』～

１．ペアでリズム伴奏をつくり歌に重ねることで，表現がより豊かになることを実感する学び

本単元では，ペアの友だちとリズム伴奏をつくって重ねる活動を通して，楽曲『山のポルカ』をより楽しく願いに合った表現につくりあげていく子どもを目指す。

楽曲『山のポルカ』は楽しい歌詞で，リズムが明快でわかりやすいため，子ども一人一人が自分なりの願いをもちやすく，楽しく表現を追求していくことができる。また，主旋律や伴奏で「タン・タタ・ウン・ンタ」の４種類のリズムしか使われていないこと，４小節で１フレーズとなり，それを繰り返すという単純な楽曲の構成であることなど，初歩的な段階のリズム伴奏づくりに適している。

『山のポルカ』の歌詞から子どもたちは，楽しい山のおじさんのイメージを広げ，歌唱表現を楽しみ，もっと楽しい表現にしようと，楽曲に使われているリズムを使って，リズム伴奏を重ねて，「つくって重ねる」活動を展開していく。これにより，「タン（♩）・ウン（𝄾）・タ（♪）・ン（𝄾）」を使ったリズムや，その使い方・重ね方を知り，それらを感受する力や２拍子の拍感を身につけていく。

この活動を通して，ン（𝄾）の使い方やリズムの重ね方を更新し，それらを手がかりに表現を再構成することで，自分の願った，より楽しい「山のポルカ」へと表現を高めていくことを期待した。

２．単元の構想

(1)　単元の目標

楽曲「山のポルカ」を２拍子の流れにのって，楽器の音色やリズムを聴き分けて表現をつくり直す中で，「タン・タタ・ンタ」のリズムを使って，リズム伴奏をつくると表現が楽しくなることに気づき，仲間とともにリズム伴奏を仕上げ，歌と合わせることができる。

(2)　追求の構想　（７時間）

１次　『山のポルカ』を歌って楽しもう。（３時間）

◎どんなリズムができるかな。
（歌唱表現→リズムづくり）

２次　タンとタタ，ウン，ンタを使ってリズム伴奏をつくろう。（３時間）

◎リズムを工夫して，発表会の準備をしよう。
（もっといろいろなリズムを使うと楽しさが増す。→自分の表現を見直して「ンタ」のリズムを使おう。）
➡ **願いや音楽を特徴づける諸要素への立ち返り，取り込みによる表現の見直しと繰り返し試す活動**

３次　１年生に発表会を聴かせよう。（１時間）

◎つくったリズムを聴いてもらおう。
（発表→振り返り）

NII-Electronic Library Service

Niigata University

3．授業の実際

(1) わたしの考えたリズムけっこういいよ

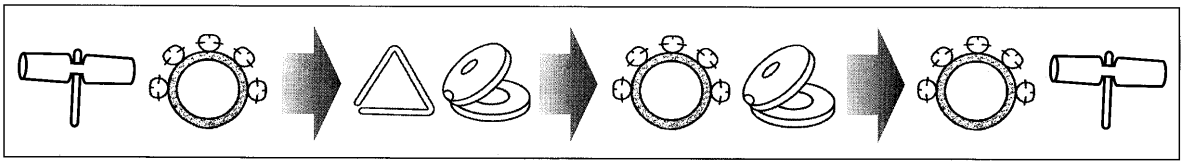
教材曲『山のポルカ』に出会い，歌ったり踊ったりして，楽曲の楽しさを十分に味わった子どもたち。音楽が大好きな晶子さんも，「山のポルカ」を，いつも笑顔で楽しそうに歌っていた。

リズムを発表する晶子さん

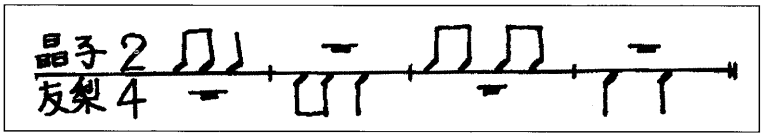
晶子さんは，自分の願いを強くもち，それに向かってどんどん追求を進めていくことができる。この単元を通して，より楽しくリズミカルなポルカにしたいと願い，自分のつくったリズムを繰り返し見直して表現を高めていく姿を期待した。

歌ったり踊ったりして楽しんだ後，「この歌を楽しむのに，もっと何かしたいことあるかな？」と尋ねたところ，「楽器を合わせたい。」と，大輔さんが発言した。そこで，楽器を使ったペアのリズムづくりに取り組んだ。晶子さんはにこにこしながら，ペアの友梨さんと一緒に楽器やリズムを試し始めた。

楽器で楽しくしたいという願いをもって，主旋律にあるリズムの最後を少し変え，リズムに合った楽器を音色を確かめながら次のように慎重に試し選んでいった。



最後に，すずとウッドブロックで次のようにタタとタンを使って，リズム伴奏を行った。



楽しくスムーズにできるようになり，満足したような顔つきで，教師に聴かせにきた。

これらの学びを通して，タタやタン・ウンのリズムの使い方やリズムや願いに合った音色の楽器の選び方を習得してきた晶子さんである。

(2) 「ンタ」のリズムを使って，リズム伴奏をより楽しくしたい

晶子さんを含む，多くの子どもたちは，自分たちのリズムができ楽器も決まり，発表したいと発言してきた。数名の子がリズム伴奏を発表したあと，晶子さんは次のように発言した。

みんなのリズムを聴いて，それを合わせた感じにして，リズムをつくってみたい。１段ずつ違うのをやって，リズムを変えたりしたい。

これは，自分とは違う友だちのリズムを聴いて，今までの自分のリズムだけでなく友だちのリズムも使いたい。１フレーズだけでなく，楽曲全体のリズム伴奏をつくって，変化に富んだ楽しいポルカにしたいという願いが芽生えてきた姿である。そ

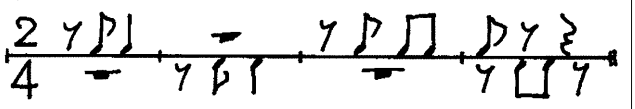
NII-Electronic Library Service

Niigata University

こで，友だちの表現を聴き，表現方法の幅を広げてほしいと願い，つくったリズムを発表することにした。グループごとで行った発表会の中で，晶子さんは自信をもって友梨さんと発表した。友だちから大きな拍手をもらい，満足そうにほほえんだ晶子さん。

発表後，全体の場で他のグループにはないリズムの使い方や重ね方をしているペアのリズムを紹介した。晶子さんは，しのぶさんペア（３人）のリズムを聴き，次のように発言してきた。

しのぶさんペアのリズム



しのぶさんペアの発表

しのぶさんペアのリズムは，流れるようで，繰り返しをやっているって感じです。いろいろのリズムがあって，それぞれ違うなって感じに聴こえて，きれいな感じがしていた。わたしも新しいリズムをつけたしてみたい。

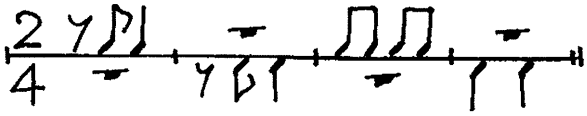
しのぶさんのペアが「ン」や「タ」を多く使い，細かくリズムを刻み，楽器ごとのリズムの分担も工夫していて，晶子さんは「いろいろなリズムがあって流れるようだ」と感じていた。特に，多用していた「ンタ」のリズムに関心を寄せた。自分が使っていなかった「ンタ」の軽快さに着目し，楽曲をもっとリズミカルに楽しくしたいという願いをもって，自分のリズムを見直そうと考えた晶子さんである。

この発表会のあと，晶子さんと同様に，大勢の子どもが「新しいリズムをつけたしてみたい。」と挙手してきた。仲間の発表によって，自分の表現を見直し，より願いにあった表現をつくっていきたいという思いを高めてきた子どもたちである。

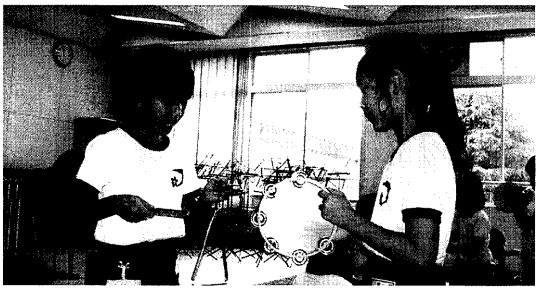
(3) 歌にあったリズムをたくさん書いて，合うものを選ぼう

次の瞬間，晶子さんは授業に入る前から，「ンタ」のリズムを手と足を使ってリズム打ちしていた。「ンタ」を使いたいという思いが現れた姿である。リズムづくりでは，晶子さんは次のように繰り返し試しながら追求を進めていった。

①のリズム



はじめに晶子さんは，①のリズムをつくってきた。これは，しのぶさんのペアのリズムを聴いて，つくりたいと考えていたもので，「ンタ」のリズムを使った，「山のポルカ」の楽しいイメージに合ったリズムである。晶子さんは，しのぶさんの発表を聴いてから，ずっとこだわり続けた「ン」（𝄾）の休符の使い方を繰り返し試すことで，そのよさを改めて実感した。そして，「ンタタン」と，リズムのまとまりとしてとらえていたものを，休符「ン」としてとらえ直し，更新してきたのである。

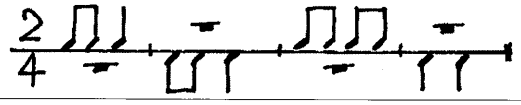


リズムができて，楽器で試す晶子さんペア

NII-Electronic Library Service

Niigata University

②のリズム



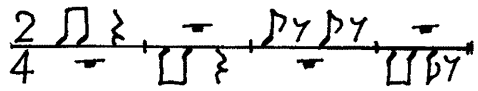
次に，晶子さんは②のリズムをつくってきた。このリズムは，最初に自分でつくったリズムであり，初めは口ずさみながら，晶子さんと友梨さん２人で手拍子を打った。書いたあとで，旋律を口ずさみながら，にこにこ笑って手拍子をする姿が見られた。

さらに，晶子さんは３つめのリズムの追求を始めた。晶子さんは，旋律に乗せながら，「タタタン　タンタン　タタタン……」と試していた。途中で教師が，全部変えるのかと聞いたところ，「４つ（１つとは，４小節分のリズム）考えて，いいのを２つ選ぶ。」と話し，２つめまでのリズムを教師に聴かせた。「いいリズムだね。」の教師の言葉に，にっこり笑ってその後の追求に向かった。そして，「タタウン　タタウン　タウタウ　タタタ」と歌いながら手拍子を試していた。

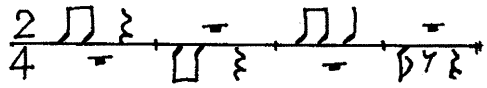
晶子さんは，次のように３つめのリズムを繰り返し試し，追求した。

③のリズムづくりの流れ

①歌いながら手拍子を打つ

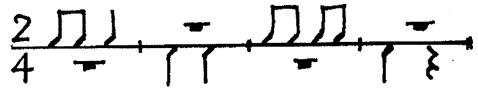


②３・４小節目で何度も繰り返し試している。

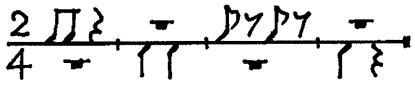


この後３小節目を♫♫と♫♩を繰り返し手拍子した。入れたいリズム「タウ」と，全体とのバランスを考えて何度も試して手拍子をした。

③２小節目に目が向き，３小節目とともに変えてくる。



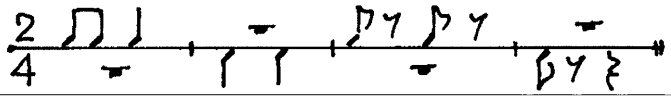
④２人で手拍子してみる。



２小節目を，口では「ターター」と歌っていたが，よりリズミカルである「タンタン」にかえてきた。

このように，休符を使い，よりリズミカルになるように様々なリズムを繰り返し試しながら，『山のポルカ』の楽しさが表れるようなリズムを追求していった晶子さんである。この追求の中で，晶子さんは手拍子を打つ際に，タン（♩）のリズムと「タウ」（♪𝄾）のリズムを，はっきり区別し，休符は手を握るようにしながら，次のようなオリジナルの「タウ」（♪𝄾）のリズムを生み出した。①②③④のそれぞれのいいところを取り入れて完成させたリズムである。

できあがった③のリズム



これは，更新した「ン」（𝄾）の休符を繰り返し試す中で，「タ」（♪）との組み合わせを考え「タウ」のリズムをつくり，リズム伴奏を再構成していった姿である。

NII-Electronic Library Service

Niigata University

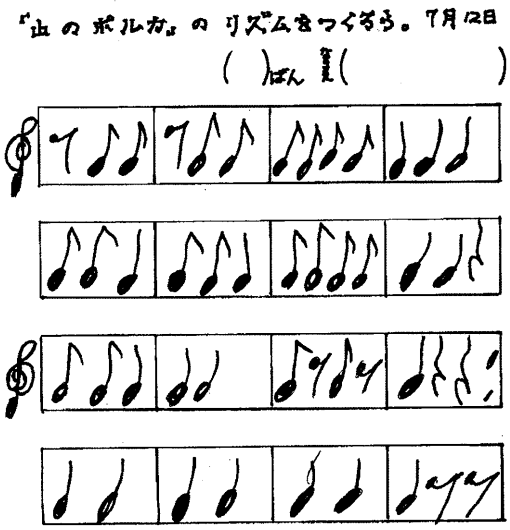
(4) やったー！リズム伴奏ができあがったよ

繰り返し試しながら，追求を続けた晶子さんは，４つめのリズムをつくりあげたあとで，友梨さんと「やったー」と声を上げていた。

その後，さらにリズミカルで楽しくしたいと，しのぶさんのペアのリズム「ンタ」を入れた１つめと自分がオリジナルでつくった「タウ」を入れた３つめのリズムを使い，リズム伴奏を完成させた。

最初につくったリズムで追求を終わらせず，友だちの表現を参考に，願いをもって繰り返し試し，表現をつくりあげていった晶子さん。最初の時より，多くの種類のリズムを使い，変化に富んだリズム伴奏をつくりあげ，自分が願ったとおりの表現になったことを実感し，大満足の晶子さんだった。

晶子さんの書いた４つのリズム



Ⅲ　成果と課題

（成果）

繰り返し試す学習過程は，表現と技能の高まりに働いた。

子どもたちは，自分の表現を見直し，繰り返し試す活動を経て，それぞれのペアの個性の表れた表現に仕上げてきた。「試しの表現→中間発表と音楽を特徴づけている諸要素の更新→表現の再構成」という流れは，子どもたちの表現を高めることにつながることが見えてきた。また，初めのうちは，なかなかリズミカルに拍に乗って手を打てなかった子どもも，発表では拍の流れにのって，リズムを打つことができた。リズムづくりを追求していくうちに，繰り返し練習を重ね，技能の高まりも見られた。

（課題）

より具体的な願いをもつための単元導入を工夫する必要がある。

本単元では，子どもは楽曲を「楽しむ」という活動そのものが願いとなり，歌詞に基づいた具体的な願いにまで高まらなかった。歌詞や楽曲に含まれる様々な手がかりに着目させる手だてを工夫し，一人一人が個性的なとらえをしてイメージを広げ，より明確な願いがもてる単元導入をする必要がある。

＜主な参考文献＞

河邊　昭子　2005　「学力の質的向上をめざす音楽科授業の想像」明治図書
島崎　篤子　1993　「音楽づくりで楽しもう！」日本書籍
金本　正武　2002　「新しい教育課程の展開　小学校音楽科」東洋館出版
西澤　昭夫　2002　「音楽教育における『不易』と『流行』」教育芸術社

NII-Electronic Library Service